

平成 27 年度

病害虫発生予報第 4 号

平成 27 年 7 月 23 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス(ネギアザミウマとネギハモグリバエ(こついで))	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、穂いもち、白葉枯病、斑点米カメムシ類、トビイロウンカの発生量は**平年並**、紋枯病、イネクロカメムシ、ツマグロヨコバイ、セジロウンカの発生量は**やや少**と予想されます。

ダイズでは、ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類の発生量は**平年並**と予想されます。紫斑病、コガネムシ類の発生量は**やや少**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病、かいよう病(温州、中晩柑)、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**と予想されます。

果樹共通では、カメムシ類の発生量は**やや多**と予想されます。カンキツ、ナシ、カキ等での被害発生に注意し、圃場への飛来が認められたら直ちに防除してください。

3) 茶

チャでは、チャノミドリヒメコバヤの発生量は**やや多**と予想されます。開葉初期に防除してください。炭疽病、チャノキイロアザミウマ、チャノコカクモンハマキの発生量は**平年並**、カンザワハダニの発生量は**少**と予想されます。

4) 野菜

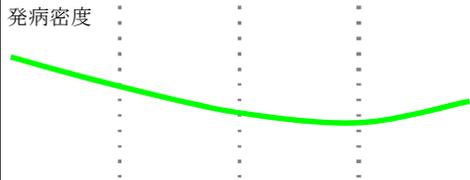
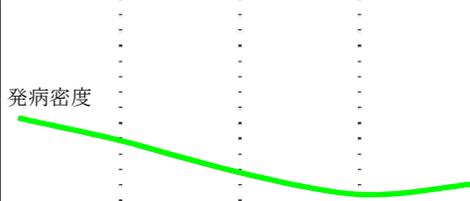
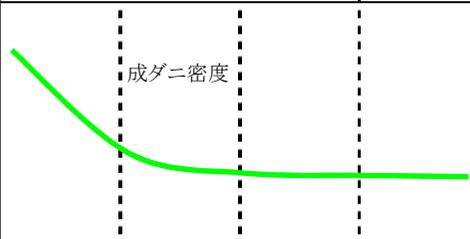
イチゴでは、炭疽病の発生量は**平年並**と予想されます。

農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

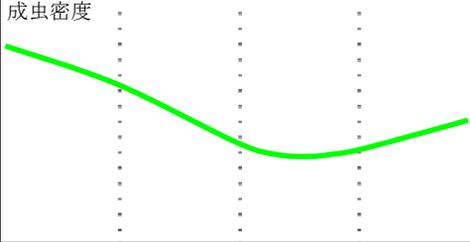
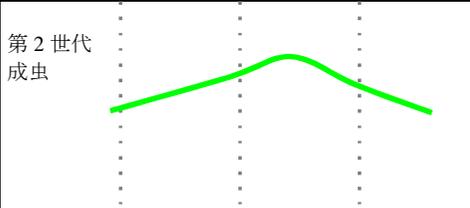
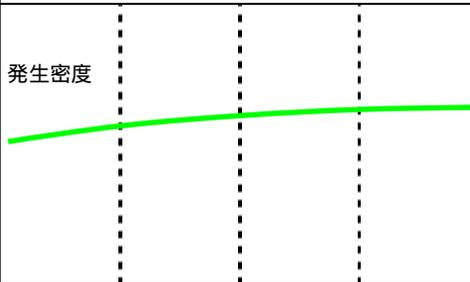
2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	平年並	中	普通	出穂 ↓				1) 病害虫防除技術情報第13号(7月17日発表)。 2) 葉いもちが上位葉で発生している圃場では、感染の恐れがあります。発生状況に注意してください。 3) これから出穂期となる圃場において、薬剤散布する場合は、出穂始めから穂揃い期に実施してください。
	紋枯病	—	やや少	中	低	出穂 ↓				1) 高温多湿条件で発病が助長されます。 2) 多肥、過繁茂の圃場では発生しやすくなります。 3) 薬剤散布は出穂7～10日前に実施してください。
	白葉枯病	—	平年並	小	低					1) 常発地では、台風や集中豪雨の遭遇直後に薬剤散布してください。 2) 「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	平年並	中	普通					1) 薬剤散布は穂揃い期に実施してください。広域での一斉防除が効果的です。 2) 中山間など山沿いの地域では、穂揃い期防除の7～10日後に2回目の防除をしてください。 3) 平坦地域においても、防除後に発生が確認された場合は、2回目の防除を実施してください。 4) 周囲よりも出穂の早い水田および遅い水田では、被害が集中するので防除を徹底してください。
	イネクロカメムシ	—	やや少	小	低		被害量			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	—	やや少	中	低	成虫密度				1) 9月上旬までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません
	セジロウンカ	—	やや少	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
	トビイロウンカ	—	平年並	小	低	成虫密度				1) 本年は多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	—	やや少	小	普通	発病密度				1) これから播種する圃場では、種子消毒を徹底してください。 2) 莢が形成され始めたら、薬剤散布をしてください。
	コガネムシ類	—	やや少	中	普通	成虫密度				1) 通常は防除の必要はありませんが、多発する場合は加害初期に防除してください。 2) ヒメコガネとドウガネブイブイは夜行性の種のため、夕方に薬剤散布すると効果的です。
	ハスモンヨトウ	—	平年並	小	普通	被害量				1) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除して下さい。 2) 発生量が急増することがありますので、防除所ホームページにおいて、フェロモントラップでの誘殺状況に注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	月上旬	中旬	下旬	
ダイズ	吸実性カメムシ類	—	平年並	中	普通			開花 ↓		<ul style="list-style-type: none"> 1) 近年、ミナミアオカメムシによる被害粒の多発や、青立ち症状が増加しています。 2) 薬剤散布は、9月中旬(開花 20 日後・莢伸長期)と 10 月上旬(開花 40 日後・子実肥大中期)の 2 回散布が効果的です。 3) 遅くとも、9 月下旬(開花 30 日後・子実肥大初期)までに 1 回目の薬剤散布をしてください。 4) 移動性が高いため、広域一斉防除が効果的です。 5) エチプロール剤およびジノテフラン剤は、ミナミアオカメムシの殺虫効果が高いことが確認されています。
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布を定期的実施し、8 月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 梅雨明け後は感染源となる枯枝が増加するので、切除に努めてください。 3) 薬剤散布後、積算で 200mm 以上の降雨があれば次の防除を実施してください。
	かいよう病	—	温州平年並 中晩柑平年並	温州小 中晩柑中	温州低 中晩柑普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、薬剤防除を行ってください。 2) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。
	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通	成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 1 葉当たりの雌成虫寄生数が 0.5~1.0 頭程度を目安に防除してください。 2) 高温により活動が停滞する時期ですが、圃場での発生状況をよく確認し、多発している場合は防除してください。 3) 薬剤散布は葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。 4) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通	<p>成虫密度</p>				<ol style="list-style-type: none"> 寄生果率 10%になった時を防除の目安にしてください。 7月以降は寄生部位が果頂部に移ります。
果樹共通	カメムシ類	—	やや多	中	普通	<p>チャバネア オカメムシ</p> <p>ツヤアオカ メムシ</p>				<ol style="list-style-type: none"> 圃場内を観察し、飛来が認められたら防除を実施してください。 圃場(特にナシ、カキ)によっては局所的に飛来してきます。過去に発生が多かった圃場周辺では注意してください。 ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると袋の上から加害されることがあります。
チャ	炭疽病	—	平年並	小	普通	<p>感染</p> <p>発病</p> <p>次の感染</p>				<ol style="list-style-type: none"> 1葉期頃に葉の毛茸がとれた傷から感染します。 感染好適温度は 25℃～27℃です。 降雨が続くと病斑葉から感染します。 耐性菌が出現しやすいため同一系統の薬剤の連用は避けてください。
	カンザワハダニ	—	少	小	低	<p>成ダニ密度</p>				<ol style="list-style-type: none"> 病害虫防除技術情報第3号(4月2日発表)。 年間 10 世代程発生します。 夏季の 30℃以上の高温条件下では、発生が抑制されます。 抵抗性の発達を避けるため、同一系統の薬剤の連用は避けてください。
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	中	普通	<p>成虫密度</p>				<ol style="list-style-type: none"> 病害虫防除技術情報第8号(6月1日発表)。 年間 8 世代程発生します。新芽の先が褐変し、ひどいときは落葉します。 晴天が続くと発生が多くなります。予測式(7月17日)では、発生ピークは8月第2半旬、第5半旬頃です。 新芽の開葉初期に防除してください。 幼虫は葉裏に生息するので丁寧に防除してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通	成虫密度		<ul style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第8号(6月1日発表)。 2) 年間8世代程発生します。新芽の先が褐変し、ひどいときは落葉します。 3) 晴天が続くと発生が多くなります。予測式(7月17日)では、発生ピークは7月第6半旬、8月第3半旬頃です。 4) 新芽の開葉前～開葉初期に防除してください。 5) 幼虫は葉裏に生息するので丁寧に防除してください。 		
	チャノコカクモンハマキ	—	平年並	小	普通	第2世代成虫		<ul style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第5号(5月7日発表)。病害虫防除技術情報第10号(6月4日発表)。 2) 若齢幼虫期に防除してください。防除適期は例年7月第6半旬の成虫発生ピークから7日～10日後頃です。 3) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。 		
イチゴ	炭疽病	—	平年並	中	普通	発生密度		<ul style="list-style-type: none"> 1) 発病株は感染源となるため、周辺株も含めて速やかに除去し、圃場外に持ち出して適切に処分してください。 2) 薬剤による予防防除を徹底してください。葉かき作業後や降雨、台風等の前後は特に重点的に防除してください。 3) 耐性菌の発生を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けてください。 4) 病原菌を含む水滴の跳ね返りによって感染が拡大します。水滴が跳ね返らないよう、丁寧に灌水を行ってください。 		

3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多い予想 (—)</p> <p>2) 台風11号の影響により、7月15～17日に大雨に遭遇 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、葉いもちの発生圃場率8.8%(平年26.0%)と少、発病度0.4(平年2.6)と少、発病株における上位葉への進展率6.0%(平年1.1%)と多 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、葉いもちの発生量は少～やや多(概して平年並)。一部地域では多発を確認 (+)</p> <p>考察: 今後の気象条件、巡回調査結果および一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	紋枯病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、気温は平年並か高い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率1.6%(平年9.8%)と少、発病株率0.1%(平年1.6%)と少 (—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して少) (—)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられますが、今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 台風11号の影響により、7月15～17日に大雨に遭遇 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して少) (—)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並に少と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多い予想 (±)</p> <p>2) 予察灯(松阪市・6月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ14頭(平年38.6頭)と少、アカヒゲホソミドリカスミカメ8頭(平年67.5頭)と少、クモヘリカメムシ0頭(平年0.1頭)とやや少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、圃場内および畦畔イネ科雑草すくい取りによる、中型種(ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類)の発生地点率25.0%(平年33.8%)と少、すくい取り成幼虫数0.5頭(平年1.3頭)と少、微小種(アカスジカスミカメ)の発生地点率37.5%(平年27.4%)と多、すくい取り成虫数3.0頭(平年3.3頭)と平年並。ミナミアオカメムシ成幼虫の発生を県北中部で確認 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少～平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬～7月第1半旬)では、誘殺数は水田位置13頭(平年10.3頭)とやや多、畑位置124頭(平年262.9頭)と少(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率5.9%(平年22.9%)と少、被害株率0.5%(平年3.2%)と少(—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～並(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(6月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置0頭(平年0.9頭)と少、松阪市・畑位置466頭(8年平均2753.9頭)と少の傾向、伊賀市1頭(平年20.7頭)と少、紀北町7頭(平年2.0頭)と多、御浜町14頭(平年2.7頭)と多(—)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率31.3%(平年29.8%)と平年並、払い落とし成虫数1.1頭(平年3.0頭)と少(—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置0頭(平年0.9頭)と少、松阪市・畑位置11頭(8年平均17.6頭)と平年並の傾向、伊賀市0頭(平年1.7頭)と少、紀北町0頭(平年6.4頭)と少、御浜町3頭(平年20.4頭)とやや少(—)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、紀州地域では、発生圃場率3.6%(平年34.4%)と少、払い落とし成虫数0.04頭(平年1.6頭)と少、県全体では、発生圃場率1.6%(平年6.0%)と少、払い落とし成虫数0.02頭(平年0.8頭)と少(—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並に少)(±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬まで多飛来の報告はなし(—)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	トビイロウンカ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～6月第6半旬)では、御浜町に5月第6半旬に初飛来し、その他3か所は未飛来(平年7月上旬まで未飛来)(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率0%(平年0.1%)と平年並に少、払い落とし成虫数0頭(平年0.2頭)と平年並に少(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して平年並に少)(±)</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報では、7月上旬まで多飛来の報告はなし(—)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	—	やや少	要因 1) 巡回調査圃場(昨年11月)では、紫斑粒の発生率0.1%(平年0.4%)と少(—) 考察: 昨年の紫斑粒発生状況から、本圃への感染源の持ち込みがやや少ないと考えられ、予想発生量はやや少と考えます。
	コガネムシ類	—	やや少	要因 1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬~7月第2半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ126頭(平年214.5頭)と少、ヒメコガネ87頭(平年55.7頭)と多(±) 2) 県予察圃フェロモントラップ(5月上旬~7月上旬)では、誘殺数はマメコガネ75頭(平年193.7頭)と少、ドウガネブイブイ0頭(平年32.9頭)と少、ヒメコガネ1頭(平年8.2頭)と少(—) 3) 一般圃場では、発生量は平年並に少(±) 考察: 予察灯およびフェロモントラップの誘殺状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。
	ハスモンヨトウ	—	平年並	要因 1) 県予察圃フェロモントラップ(6月第4半旬~7月第2半旬)では、誘殺数は菰野町33頭(9年平均173.0頭)と少の傾向、津市285頭(9年平均250.1頭)と平年並の傾向、松阪市嬉野川北町153頭(平年167.7頭)平年並(±) 2) 一般圃場では、発生量は平年並に少(±) 考察: フェロモントラップの誘殺状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。
	吸蜜性カメムシ類	—	平年並	要因 1) 予察灯(松阪市・6月第1半旬~6月第6半旬)では、誘殺数はイチモンジカメムシ0頭(平年19.5頭)と少、ミナミアオカメムシ水田位置1頭(5年平均1.8頭)と平年並の傾向、畑位置12頭(5年平均18.4頭)と平年並の傾向、クサギカメムシ43頭(平年25.5頭)と多(±) 考察: 予察灯の誘殺状況から、予想発生量は平年並と考えます。
カンキツ	黒点病	—	平年並	要因 1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想(—) 2) 県予察圃(7月中旬)では、果実発病度74.0(平年31.7)と多(+) 3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、果実発病度0.5(平年1.5)と少(—) 4) 一般圃場では、発生量は平年並(±) 5) 感染源となる枯枝は平年並(±) 考察: 一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (—) 2) 台風11号の影響により、7月15～17日に風雨に遭遇 (+) 3) 県予察圃(7月中旬、新甘夏)では、発病葉率0%(平年4.5%)と少、発病果率0%(平年12.4%)と少 (—) 4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、温州みかんは発病葉率0%(平年0.7%)と平年並、発病果率0%(平年0.09%)と平年並、中晩柑は発病葉率2.7%(平年9.7%)と少、発病果率0%(平年2.5%)と少 (温州土、中晩柑—) 5) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並(概してやや少) (—) <p>考察：温州みかんでは現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では現状の発生量はやや少と考えられますが、気象要因による今後の増加を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ミカンハダニ	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (—) 2) 県予察圃(7月中旬)では、100葉当り寄生頭数は無防除区で7頭(平年6.1頭)と平年並、慣行防除区で3頭(平年4.5頭)とやや少 (±) 3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発生圃場率46.2%(平年40.8%)とやや多、新葉における寄生葉率7.5%(平年8.7%)とやや少、寄生頭数0.16頭/葉(平年0.35頭/葉)と少 (±) 4) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並(概して平年並) (±) <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月下旬)では、誘殺数0.9頭/日(平年1.5頭/日)と少 (—) 2) 県予察圃(7月中旬)では、100果当り寄生虫数2.8頭(平年9.8頭)と少 (—) 3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、被害果率5.2%(平年0.8%)と多 (+) 4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±) <p>考察：一般圃場での発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:7月1日～7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 5,206 頭(平年 2,938.7 頭)と多、ツヤアオカメムシ 3 頭(平年 22.1 頭)と少 (+)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月21日～7月10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 244 頭(平年 385.4 頭)とやや少、ツヤアオカメムシ 21 頭(平年 258.0 頭)と少、クサギカメムシ 68 頭(平年 58.9 頭)と平年並 (—)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月17日～7月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は山地(津市白山町川口)で 1,524 頭(平年 811.2 頭)と多、中間地(津市白山町二本木)で 1,523 頭(平年 1,511.0 頭)と平年並、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 279 頭(平年 321.2 頭)と平年並 (+)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第2週)では、カンキツ圃場での叩き落とし虫数 0 頭(平年 0.03 頭)と平年並、カキ圃場での被害果率 0%(平年 0.9%)と平年並 (±)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 巡回調査結果及び一般圃場での発生状況から現状の発生量は平年並と考えられますが、予察灯とフェロモントラップの誘殺数が増加していることから予想発生量はやや多と考えます。</p>
	炭疽病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (—)</p> <p>2) 県予察圃では、二番茶期の病葉数 0 枚/m²(9年平均 0.6 枚/m²)と少の傾向 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、発病葉数 0.5 枚/m²(平年 3.1 枚/m²)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	カンザワハダニ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (—)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、寄生葉率 0%(平年 2.1%)と少、寄生頭数 0.003 頭/葉(平年 0.07 頭/葉)とやや少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、寄生葉率 0.2%(平年 0.3%)と少、寄生頭数 0.003 頭/葉(平年 0.01 頭/葉)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (—)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられ、引き続き予想発生量は少と考えます。</p>
チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第4半旬～7月第3半旬)では、捕殺数 26 頭(平年 14.2 頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、叩き落とし虫数 3.5 頭(平年 2.2 頭)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>	

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(6月第4半旬～7月第3半旬)では、捕殺数 6,725 頭(平年 7,607.3 頭)とやや少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、叩き落とし虫数 2.9 頭(平年 29.9 頭)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(6月第4半旬～7月第3半旬)では、誘殺数 158 頭(平年 456.9 頭)と少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数 0 枚/m²(平年 0.4 枚/m²)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、ハマキムシ類の発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1ヶ月予報(7月16日発表)によると、平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い予想 (±)</p> <p>2) 台風 11 号の影響により、7月15～17日に大雨に遭遇 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第2週、親株)では、発病株率 0%(平年 0.4%)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少であるが、一部で発病を確認 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は少と考えられるが、気象要因による今後の増加を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期(平年比)： 平年の発生日日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量(平年比)： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

				平年値			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		多	多	

発生量(程度)： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率(平年比)： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除が必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス「ネギアザミウマとネギハモグリバエ」について

三重県のネギでは最近、ネギアザミウマ(写真1)やネギハモグリバエ(写真2)の発生が多く問題となっています。商品価値を著しく低下させる被害を発生させ、多発すると防除が難しい害虫です。(図1)

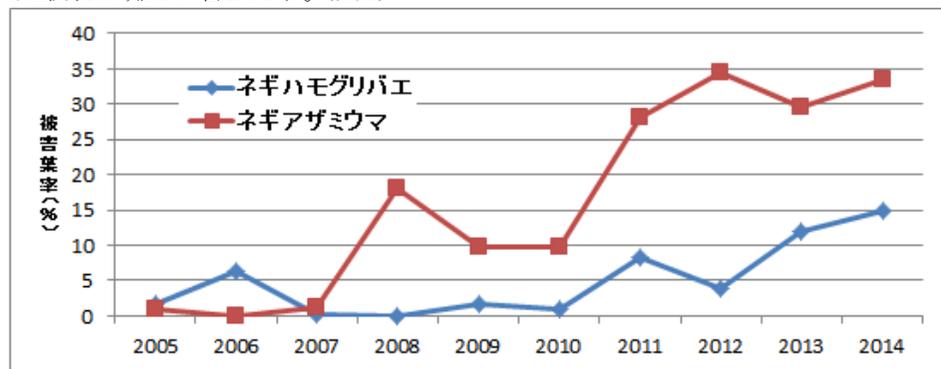


図1 過去10年間の7月のネギハモグリバエとネギアザミウマの被害葉率の推移



写真1 ネギアザミウマ



写真2 ネギハモグリバエ

(野菜茶業研究所・飯田氏提供)

ネギアザミウマ

◆生態◆

- ・ネギの露地栽培では早春から晩秋にかけて、施設栽培では周年で発生します。
- ・ネギ以外にも多くの作物を加害します。また、加害による被害のほか、ネギえそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)を媒介します。

◆被害の様子◆

- ・ネギアザミウマは成幼虫が葉の表面を吸汁するため、細い針金でひっかいたようなカスリ状の白い吸汁痕(写真3)が残ります。
- ・ネギアザミウマは育苗時に多発すると新葉がよじれ、生育不良になることがあります。

ネギハモグリバエ

◆生態◆

- ・成虫は、ネギの葉組織内に卵を産み付けます。
- ・幼虫はネギの葉内に潜り、内側から加害し、老熟すると地中に入って蛹になります。

◆被害の様子◆

- ・ネギハモグリバエは、針先でつついたような細かい点が一列に並んだ産卵痕(写真4)と、幼虫が葉の内部を絵描き状に食害しながら進んだ食害痕(写真5)が特徴です。
- ・ネギハモグリバエは幼虫が葉の内部に潜ることから、幼虫時の防除が困難です。



写真3
ネギアザミウマ食害痕



写真4
ネギハモグリバエ産卵痕



写真5
ネギハモグリバエ食害痕
(食害が進んだもの)

ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ両種共通

◆発生しやすい条件◆

露地栽培では高温乾燥が続くと発生しやすくなります。また、雑草を住処とするので、ハウスや圃場の周りに雑草が生い茂っている場合は、成虫の飛び込みで増殖する可能性があります。

◆防除対策◆

- 1) 圃場内や周辺の雑草が発生源です。普段から除草に努めましょう。
- 2) 多発すると防除が困難になるので、発見したら早めに防除してください。
- 3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避けてください。

6. 気象のデータ

東海地方1か月予報(平成27年7月16日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう1ヶ月間は平年に比べ晴れの日が多いでしょう。平均気温は高く、降水量は平年並、日照時間は平年並か多い見込みです。

1週目 7月18日～24日	期間のはじめは湿った気流の影響で雨の降る日がありますが、その後は高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.4日・4.0日
2週目 7月25日～31日	太平洋高気圧の張り出しは平年より強く、平年に比べ晴れる日が多い見込みです。	同 2.0日・4.6日
3～4週目 8月1日～14日	太平洋高気圧に覆われ、平年と同様に晴れる日が多い見込みです。	同 3.9日・9.5日

東海地方週間天気予報(平成27年7月22日10時30分 名古屋地方気象台発表)

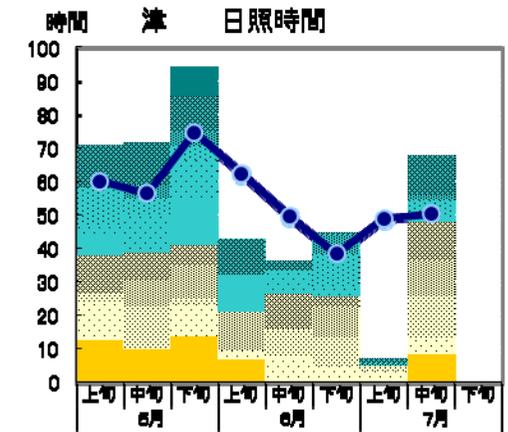
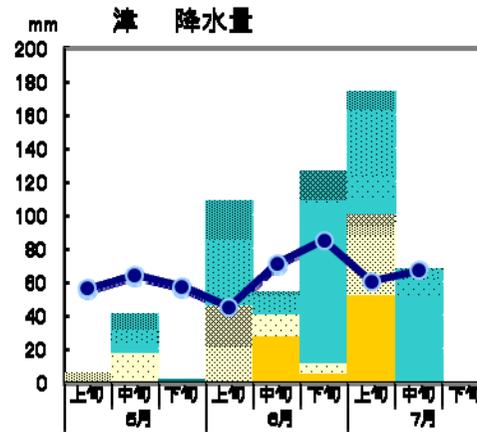
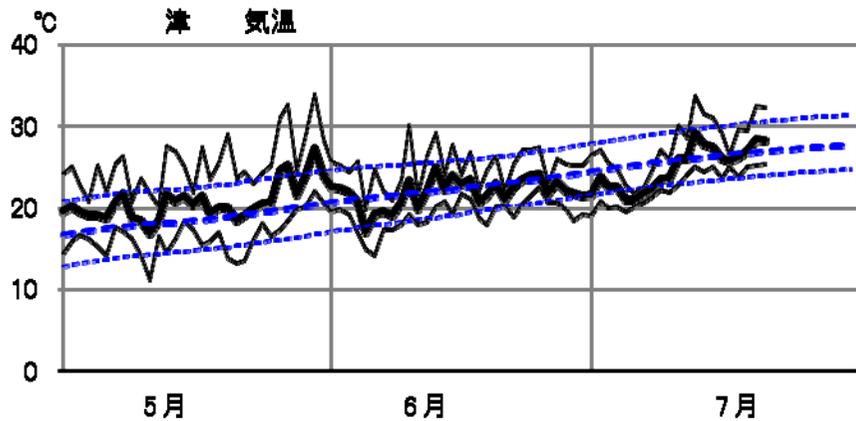
予報期間 7月23日～7月29日

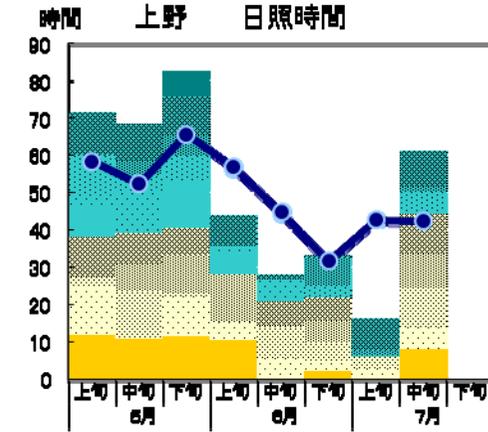
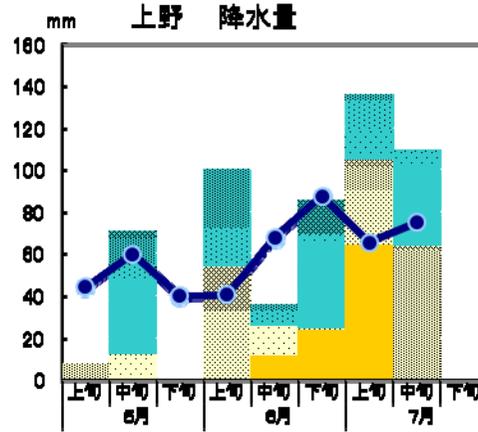
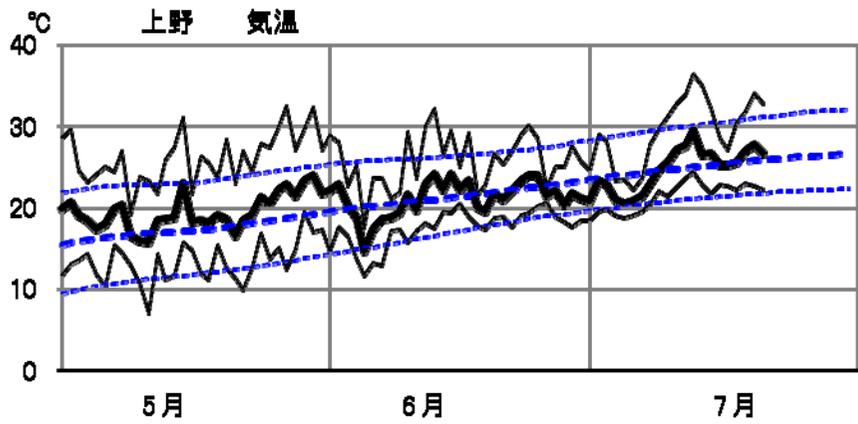
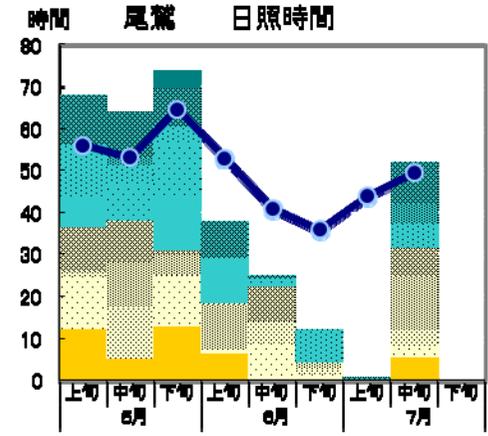
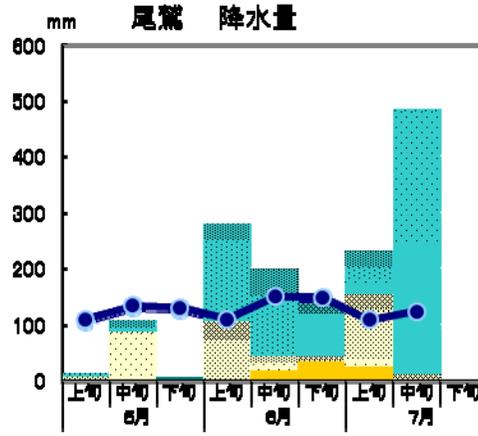
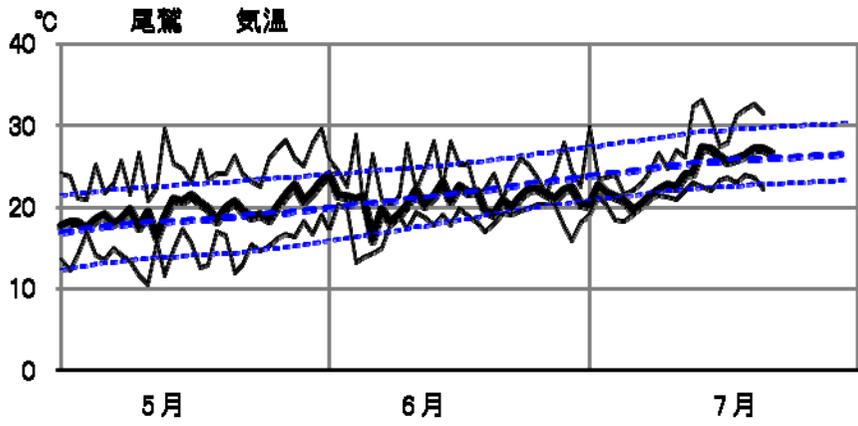
向こう1週間は、期間の前半は湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の日があるでしょう。後半は高気圧に覆われて晴れる見込みです。

最高気温と最低気温はともに、平年並か平年より高いでしょう。

降水量は、平年並の見込みです。

気象の日別推移(気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (7月21日まで)





凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- - - 年平均
- - - 年最高
- - - 年最低

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬年平均値

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬年平均値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

第1回 4月23日(木)(済み) 第2回 5月28日(木)(済み)

第3回 6月25日(木)(済み) 第4回 7月23日(木)(今回)

第5回 8月27日(木) 第6回 10月22日(木)

第7回 3月24日(木)

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h26yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

7) IPM(総合的病害虫・雑草管理)実践指標について

三重県では IPM を実践する上で必要な農作業の具体的な取組内容を示した作物別の指標を公表しています。農業者の皆さんの取組について、現状把握と今後の気づきにご活用ください。病害虫防除所ホームページにリンクを設定しています。

三重県農林水産部農産物安全課ホームページ内

<http://www.pref.mie.lg.jp/NOAN/HP/work/ipm/main.htm>